1997·10 MUH VOL.14

CONTENTS

HAYANO GROUP
COMMUNICATION MAGAZINE

表紙の写真
「旧高野家住宅」

塩山市上於曽にある、国指定の重要文化財で、この度主屋の改修が終わり一般公開された。旧高野家は、別名「甘草屋敷」とも呼ばれ、江戸時代は八代将軍徳川吉宗の時、将軍の命により高野家が薬用である甘草を栽培して幕府に納めたことに由来する。主屋は、山梨県東部地方によく見られた「切り妻造り」で代表的民家の建築物。一部三階建てで、屋根は銅板ぶき、建物の幅は24．8メートル、奥行きは10．9メートルある。敷地の広さは約4,930平方メートルで、庭園には名前の由来にもなった甘草の他、ゲンノショウコなど約60種ほどの薬草類が栽培されている。昭和28年（1953）に主屋が、平成8年（1996）7月には周辺の建物などが国の重要文化財に指定された。

（写真と文：浅川　毅）

「MUH」vol.14 1997.10.1
企画／早野グループ「MUH」編集室
深沢進・矢田道生・横田雅幸・久保田充一
編集／株式会社ニュースメディア甲府
三神弘・三井君男／山川エミ・高山ひとみ／原田陽子／小西順人・杉村聡／浅川毅・標克明
印刷／電算印刷株式会社

誌名の「MUH」は、早野組の社訓である「和」を託したMate（仲間）Union（結束）Harmony（調和）の頭文字からとりました。幻のムー大陸のロマンを目指します。

フォーラム
テーマ　カレー　江宮隆之・古屋久昭・岩崎正吾・佐藤眞佐美　2

対談
山梨21　山田　耕三 氏（画家）
ホスト　早野　潔　4
日々新鮮、通勤途中の風景　清里で知った大自然の生命
急速に失われていく風景　いま描き残さなければ
読み取りたいメッセージ　貴重な資料、山梨の今昔

トピックス
企業不祥事と企業倫理の確立　10

企業ウォッチング
甲雲社　大久保和也氏　13

サークル訪問
一元流グループ　14

インフォメーション
トヨタホーム山梨・甲府通運・早野組・トヨタビスタ山梨　16

ようこそ歴史
小沢 善兵衛　上野晴朗　18

アートへのまなざし
ボクの美術品観察日記7　山本育夫　20

トレンド
スポーツの秋　22

BOOK　こんなところに山梨…　BOOKコーナー　「山梨の童話」　23

滝を見るハイキング
雨畑川　見神の滝　上野　巌　24

甲府通運前史を訪ねる（8）　林陽一郎　25

ユーザー訪問
株式会社 日向宝飾　26

お家拝見
小泉　晃治さん　27

リレーエッセイ
タウン・ウォッチング　宮川佳代子　28

ときのひと・FACE
株式会社 早野組　河西　和彦さん　29

おしゃれ　ファッションプラザちの　たべる　伊藤青果店　30

お茶の間の民俗学（5）
―年中行事の習俗とその心―　志摩　阿木夫　31

コラム
某月某日　32

少年よ、大志を抱け。その前にカレーを　江宮隆之

多分カレーライスが日本文学に始めて出てくるのは夏目漱石の『三四郎』で、三四郎が与次郎に連れられて淀見軒に「ライスカレー」を食べにいった場面ではないか。カレーライスではなくライスカレーである。この違いは何か、というと山の形に盛られたライスにカレーを添えるのが「ライスカレー」であって、ライスの上にカレーをかけるのが「カレーライス」だという説がある。いいではないか、どちらでも。

ところでここでも蘊蓄である。うんちく、と読む。カレーは18世紀にインドから帰ったイギリス人が各種の香辛料を使って作ったのが、今ヨーロッパや日本で食べられている「カレー」である。もちろん本場インドのカレーとは味も外見も異なる。

これが、開国後の日本に横浜から入ってきた。明治のごく始めのことだという。こんな話がある。「少年よ、大志を抱け」で知られるクラーク博士は札幌農学校に着任して生徒たちの食生活改善に努めた。肉食を、というのである。寮の規則に「生徒は米食を食すべからず。但しらいすかれえはこの限りに非ず」と書いて張り出したという。「らいすかれえ」がカレーライスのことを指すのは言うまでもない。

実は「ライスカレー」の命名者はクラーク博士であった。クラーク博士は明治9年に札幌にやってきた。「カレーライス」の名前は既に日本では130年近い歴史を持つことになる。

ところで、カレーというと「俺はカツカレーの方が好きだ」という人も多いのではないか。カレーにはどういうわけか揚げ物がよく合う。カツではなくてイカフライでもコロッケでもうまい。

カツレツは明治28年に銀座の煉瓦亭を開業した木田元次郎が考案した。ちなみにカツ丼は大正10年、当時早稲田の学生だった中西なる人物が行きつけのカフェーの店主に勧めて作らせたといわれている。

このカツレツとカレーを合わせて「カツカレー」を作り出したのは誰かまで調査は進んでいない。カツカレーは大好物であるが、決して許せないのはカレーパンだ。「あれは邪道だ」と主張することにしているが、誰もキョトンとする。本当にうまいの？　カレーパン。

■1948年山梨県生まれ　第13回歴史文学賞　第8回中村星湖賞受賞　『白狐の人』（河出書房新社）が5月文庫本化　7月に『小西行長』（PHP文庫）を刊行

究極のカレーは日本最北端で　古屋久昭

稚内市に住んでいる本多さん夫妻から、久しぶりに手紙が届いた。といっても10年も前のこと。「人生の後半、こんど私たちは宗谷岬でカレーショップを始めることになりました。日本一のカレーづくりに挑戦します」。

本多さん夫妻は長い間、日本最北端の街、稚内でユースホステルの管理人を努めていた。それまでの人生を、旅を楽しむ若者たちの世話で送っていたのだ。

実は私も若いとき、世話になった一人だった。自転車で日本縦走をしていて、最北の地が稚内で、そのときは宗谷岬にテントを張って野宿をしたのだが、その翌年再び稚内を訪れたとき、今度はユースホステルに宿泊したのだ。

以来本多さん夫婦とのおつきあいは続き、6回目の稚内行きのときには、甲府から婚約者を連れて行き、夫妻には仲人になっていただいて、北門神社というところで、なんと2人だけの結婚式をあげてしまったのである。

娘が中一、小六となった年、家族四人で北海道旅行をした。成長した娘を夫妻に見ていただきながら再会を喜びあった。

私たちは案内されて、宗谷岬にある夫妻の経営するカレーショップに行った。もうそのときはユースホステルの仕事の方は辞めていて、夫妻は日本一のカレーづくりに専念していた。店の前まで来ると、「究極のうまさ、帆立のカレー」と書かれてある看板が目にとびこんできて、早くもカレー独特の香りが鼻をついてきた。店に入ると、先に来てカレーをつくっていたご主人が人なつっこい顔を暖簾から突き出して「さあ、腹一杯食べてくださいよ」と弾んだ声で言ってくれた。

たしかに「究極のうまさ、日本一の帆立のカレー」にまちがいなかった。娘たちは当然のように2杯目のおかわりをし、舌鼓を打ってばかりいた。私たちは心の中で、本多さん夫妻に拍手を贈り続けた。

その後、作詞家星野哲郎の「北の岬・歌の旅」というNHK番組（昼のプレゼント）で夫妻のカレーショップが紹介され、店は名実ともに全国に知れわたった。しかし夫妻が年老いた今、店は閉じられ、せめてもと、夫妻はカレールーのみの注文に応えているという。

■1943年御坂町生まれ　日本現代詩人会会員　日本現代詩歌文学館評議員　詩集に『料理考』『椅子の脱』『落日採集』　童話集に『虫らしく花らしく』　そのほかエッセー集『日々のおこぜれ言葉の微熱』など

カレーライスについて書きたくないこと　岩崎正吾

カレーライスについて、これだけは書きたくなかった。それなのに書いてしまうとは、まあ、気取ってみれば物書きの業みたいなものなのだろうか。これを書かせたのは、わたしではなくて「パモイド何とか様」だと思って欲しい。

初めに断わっておくが、わたしはカレーライスが大好物である。これは世代体験に由来していると思うが、カレーとラーメンはしばらく食べないと禁断症状を起こすほどである。それなのに、いまだに忘れられない忌まわしい思い出がある。

20代の初めに、高校生を引き連れボランティアキャンプに行った。毎年、夏休みの年中行事のような体験だった。ある年、1週間のキャンプが終わり、わたしたちリーダーは食事をしながら反省会をしていた。食べていたのは、近所の店から取ったカレーライスである。

そこに、別な班に行く男が入ってきた。そいつは、カレーを食べているわたしたちを見るなり、すっとんきょうな大声で言った。

「あれ、みんなでウンコ飯、食ってらあ」。

とたんに、みんな、ゲエッとなった。もったいないからわたしは最後まで食べたが、その言葉を聞く前と後では、カレーの味がだいぶ違った。デリケートな女性の中には、サジを置いてしまった人もいた。

こういう無神経な奴は、どこにでもいるものである。別な時、わたしは先輩と一緒にラーメン屋に入った。わたしはワンタンを頼んだ。これも好物なのである。やがて、わたしの前に出来上がったワンタンが運ばれてきた。いい匂いがしている。やおら箸を取ったとたんに、隣に座っていた先輩が言ったのである。

「よく、まあ、そんな女学校の便所みたいなものが食えるなあ」。

水洗しか知らない若い世代にはわかるまいが、わたしはその先輩を殺してやりたくなった。それら30年近い歳月が経つが、いまだにカレーとワンタンを食べる時はその言葉を思い出す。

言葉というのは、恐ろしいものなのである。

■1944年甲府市生れ　小説家　長編歴史ミステリー『異説本能寺・信長死すべし』が講談社文庫として再刊　新しい信玄を描いた長編歴史エッセイ『武田信玄はどこから来たか―武田騎馬隊の謎を追う』（山梨ふるさと文庫刊）が話題を呼ぶ

ところ変われば　佐藤眞佐美

新婚まもないある晩、妻の実家でテレビを観ていると「ねえ、背中かじって」と彼女がしなだれかかってきた。どきっとぼくは義父母を盗み見る。2人はそしらぬ顔だ。頬に紅がさすのが自分で分かった。内緒だけれど、結婚前からすでにぼくらは、なめるしゃぶるの一通りは実習済みで、その夜もベッドに入れば秘術を尽くすとはいかないまでも、それなりのコースを消化する予定だった。間もなく寝室へ引き上げる時間だ。何も両親のいる前で、背中のかじりっこなどしなくてもいいじゃないか、とぼくは聞こえないふりをして、そのまま水戸黄門か何かを観つづけた。

ところで、これまでそのような愛戯はコースにあったろうか。どう記憶をたどってもない。すると、相手が別にいるのだ。疑惑と嫉妬がこめかみの血管を膨れあがらせたとき、「わたしがかじってあげる」と義母がにじりよってきて、またどきっとした。母が娘の背中をかじるとはいったい…。頬の血が引くのが自分で分かった。もしかしたら山梨には新婚夫婦をかじる風習があって、つぎの間には婿の骨が…などと怯えていると、義母は妻の背中に手を入れてごりこり。妻は目を閉じ「そこ、あーきもちいい」。ぼくはよほどショックだったらしい。「顔色よくないわ」と妻が言い「じゃ、これをのんでごらん」と義母が小瓶を突き出す。はなくそほどの黒い塊を、爪楊枝の先で妻が口の中へ入れてくれた。頬っぺたが変形するほど酸っぱいものであった。

生家北海道の居間の天井に、熊の胃が吊してある風景は前回書いた。開拓地では腹が痛くても尻が痒くても、マッチの頭ほどの量の熊の胃を服まされる。舌がちぢむほど苦い。こういう伝統的な家庭薬はどこにでもあるらしく、このとき妻の実家でなめさせられたのは、青梅を時間をかけて煮詰めたもので、やはり万病に利くのだそうな。インドではこの家庭薬がカレーライスだと言うから面白い。彼らの台所には30種類を超える調味料があり、その日の家族の体調に合わせてスパイスの組み合わせを変えるそうである。こちらは目ん玉が飛び出るほど辛い。

■1939年北海道生まれ　日本児童文学者協会　日本洞窟学協会会員　著書に『怪奇！大東京妖怪ゾーン』（ポプラ社）『文ちゃんのはるかな知床』（北海道新聞社）近著に『シレットフのシルバー』（草炎社）『山梨の童話』（リブリオ出版）など

21世紀への贈りもの
17年をかけての「山梨百景」
ひと筆　ひと筆　ふるさと発見

ゲスト
山田 耕三（やまだ こうぞう）氏
画家

ホスト
早野 潔（はやの きよし）
早野組社長

日々新鮮、通勤途中の風景
清里で知った大自然の生命

早野　芸術の秋に先がけて、先生はこの9月に「山梨百景」の個展をなさいました。100点の山梨の貌（かお）、そして表情、といってよいでしょうか。

この「山梨百景」は、1980年からはじめられたスケッチだと伺っております。精力を傾けられたお仕事であるわけですが、どんな動機であられましたか。

山田　もとよりスケッチは好きでしてね、旅行に出ますと、いつも20、30点は描いてきます。駅で電車を待っている間にも、いつか通りすがる人物を描いている、というありさまです。

「山梨百景」の発想は、清里への転勤が契機でした。「八ヶ岳少年自然の家」の建設が、県職員である私に任じられた仕事でした。甲府と清里間を4年にわたって通勤しましたね。このとき、自然に対しての目が開かれていったのだと思います。

たとえば、桜の季節ですと、甲府で眺められる、韮崎でも、高根でも眺められる、清里高原の桜も眺められます。開花の時期が違いますから、およそ2カ月は桜を楽しむことができます。

おのずと、自然への観察力が増していきましたね。山梨の自然の素晴らしさに心を奪われた時期でもありました。

早野　ふつう通勤列車からの眺めというものは、しだいに平凡で、退屈なものになってしまうものなのですがね。先生の場合は、新鮮で刺激的なスケッチの対象となったわけですね。

山田　清里の原野の冬も、私の自然観をあらたなものにしてくれました。厳しい風土があってこその、春の芽吹きの喜びも知りました。この自然の生命力を描きたい、そう思うようになっていました。

早野　あわただしい暮らしのなかで、私たちはいつか、ものを確かな目で見るということをしなくなっていますよね。そのくせ、何でも知っているつもりになっている。自分の目でものを見ていない、そう言い換えてもいいでしょうか。

画家のように、ひと筆、ひと筆、丹念にものを見ていくような真剣さがありませんね。おのずと、感動も見付からない、ということになりがちです。

早野　潔

■山田耕三
1932年京都市生まれ
山梨美術協会会長　山梨県アートアドバイザー
山梨県芸術祭実行委員長
ギャラリー「ART－R」館長

山田耕三さん

急速に失われていく風景
いま描き残さなければ

山田　韮崎のはずれ、柳原というところに、古い神社と、草におおわれた水門とがありまして、なかなか情感がありました。また、ここから眺める八ケ岳が素晴らしく、私がひそかに愛していた風景でした。

ところが、ある日訪ねてみますと、あたりはコンクリートで固められ、金網のフェンスで囲まれています。愕然としました。喪失感がありました。

そのときです、もう待ってはいられない、山梨のかけがえのない自然を描き残しておかなければと、そう決心しました。

早野　第1作は、何処で描かれましたか。

山田　私の住まいに近い信玄堤です。寝つけないまま迎えた朝、そうだ、考えていてはいけない、今朝からだと、下駄履きでスケッチブックを抱え、飛び出しました。17年前のことです。

読み取りたいメッセージ
貴重な資料、山梨の今昔

早野　ご出身は、京都でしたね。

山田　はい。3歳の時に山梨に来ました。戦争さなかの混乱した時代だったこともあり、また、いじめの記憶もあり、よそ者という意識はもたざるをえませんでした。反発や、拒否反応は長らくありましたね。

早野　それが、誰よりも深いふるさと意識へと変わっていった。そこが、面白いですね。

山田　齢を経て、この山梨の自然に育てられてきたのだ、という感慨をもつようになりました。あるいは山梨の自然が、お前も山梨の人間でいいよと、やさしく自分を受け入れてくれるようになった、というべきでしょうか。

早野　100点の山梨を描こうという意欲は、そこに根ざしていそうですね。これまでこのような試みをした画家はおそらくいないでしょう。私たちはまた、作品に、その、山田耕三固有のふるさとへの思いを読み取らなければなりませんね。

この17年で、山梨の風景もたいそ

う変わってしまいました。たとえば、かつての甲府駅のスケッチを拝見したときには、時代の変化について考えさせられました。「山梨百景」は、その意味でも、すでに貴重な資料であり、折々のメッセージともなっています。

山田　大勢の方に、楽しく鑑賞していただきたいですね。山梨を散策している気分にもなれるでしょうし、また、土地の方なら、ああ、あれはどこの山だ、誰の家だ、あの木はあそこのと、親しさがつのってくると思います。

また、あらためて自分の住む土地を眺めることで、これまで知ることのなかった土地の独自さ、素晴らしさに気づいていただけるかも知れません。

早野　「吹雪の予感」という作品などは、風景を描くといっても、おそらく先生でなければ、といった作風ですね。八ケ岳を描いているのですが、黒い雲が湧いてきて今しも吹雪いてくるという自然の瞬間がとらえられています。

1匹のアリから学んだこと 自然のなかの自分の存在

早野　山梨の自然に、ふるさとの心を訪ねてのスケッチ旅行でしたが、この大きなお仕事をとおして、得たものというのはどのようなものでしょう。また、画家というのは、どんなふうにものを見ていくのでしょうか。

山田　自然のなかでの自分を発見した、ということでしょうか。若い頃は、何事によらず自分あっての世界という認識がありました。富士山がいかに雄大なものとはいえ、自分が死んでしまえばなきにひとしい、という理解です。この認識が一変しましたね。

早野　まわりに生かされているのだという受け止め方ですね。仏教でいう、悟りの境地ですね。

山田　あるとき、駒ケ岳を描こうと出かけていきました。しかし山に入っていけば行くほど、駒ケ岳は大きくなるのではなく、周囲の山のなかに退いていきます。無性に駒ケ岳が貧相に見えてくる。これでは描く気もしないと、弁当にすることにしました。

真原（まねはら）という土地でしたが、ちょうど桜の季節でした。昼飯を終えてぼんやりとしていて、ふと、かたわらを見ると、弁当のふたにアリが2、3匹たかって、残ったものを食っています。その時、誰一人の姿もない山のなかにあっては、人間も、アリも、なんら変わるところはない存在だと打たれました。

ましてや大自然のなかでは、人間とアリの違いとはいったい何なのでしょう。そういう感慨に浸り、顔を上げたとき、いきなり甲斐駒が、あっと声が出るほど間近に迫ってきました。

早野　悟りによって、心構えも、眼差しも変わった。

山田　自然を描こう、という意気ごみが、そもそも目を曇らせるのですね。自然と向かい合い、自然が語りかけてくるのを待たなければなりません。これが風景を描くにあたって大切なことだと、自分をいましめるとともに、会得しました。

早野　人を幸せにする人生観ですね。自分があって世の中があるというのでは、何をやっても不満がつのりますね。

山田　結果だけを求めるという生き方になってしまいがちです。

早野　結果は、後からついてくるものですよね。

どうしたら残せる自然 知恵ある地域づくりに期待

早野　17年という歳月のなかでは、自然はもとより、人も暮らしも変わったでしょうねえ。

山田　現代人は、進歩ということを教育され、また、信じてきました。開発や便利さが、人間の暮らしを豊かにするとも思ってきました。100のスケッチをするために各地を歩いて、時代の無残さも知りましたね。

どんな山奥へいっても、道路や橋、トンネルの工事が行われ、あたりに騒音が漂っています。川も、護岸工事によって自然らしさを失っています。あるいは、のんびりとしたたたずまいだった村が、道路の完成によって交通量が急増し、お年寄りや子供が村内を歩くのにも危険を生ずるようになっています。

私たちが求め続けてきたものはいったい何だったのだろうかと、反省させ

られました。

早野　町づくり、村づくりが盛んですが、自分の住む地域の個性を知る前に、余所がよく見えてしまう、憧れてしまう、というところがあるのかもしれませんね。自分のことは自分がいちばんよく知っているつもりで、じつはなかなかわかりません。

山田　昔のままの、素朴な自然を求め、訪ねていったのにもかかわらず、懐かしい町や村が、何年もしないうちにまったく見知らぬ町や村になっていてがっかりする、ということがよくありました。景色を眺めながらブラブラ歩きを楽しむということさえできなくなっています。

早野　そうした時代の要請を受けて、自然の景観を重視した地域づくりが、今もっとも問われていることです。

山間の道は、アスファルトでなく、土を活かそうという提案も相次いでいます。堤防においても、コンクリート以外の材料をということから、新たな技術革新も進められています。

画家の眼差しをもって、地域づくりも計画されていかなければならないでしょうね。

地道でハードな制作活動 次代へ伝える「山梨百景」

早野　先生は県立美術館の創設に奔放され、その甲斐あって、いまや県立美術館はミレーの美術館として親しまれ、全国でも有数な入館者を誇るまでにいたっています。

また、山梨美術協会の会長として、山梨の文化の水準をあげられ、さらには、県の芸術祭実行委員長として、今年は50周年の記念行事の開催でお忙しい毎日です。

こうした社会的な役割を果たされてきた時期と、この度の「山梨百景」の制作とは同じ時期に重なります。そこに山田耕三という人物の大きさと、魅力とがあります。いったいいつ絵筆をとられるのですか。

山田　ゴルフではありませんが、ハンデがある世界ではいつも優勝だと、冗談を言っています。つまり、絵を描くのは、公的な仕事の余剰の時間にやるわけですから、画家としては過酷な状況といっていいでしょうか。したがって、制作は朝の5時から8時までの3時間ということになります。

それに、人から遊びの神様とあだ名されるほど遊びが好きですから、酒は飲みますし、マージャンやゴルフもします。

早野　いつかお倒れになられましたね。

山田　あれは美術館がオープンして3年ほどたってからでした。あの頃は、一日4時間眠れればよい方で、ほとんど2、3時間でした。自分を食って生きていたみたいなものですね。

早野　いまは、お身体はいかがですか。

山田　はい、まあまあ大丈夫だと思っています。

早野　ご苦労の末に達成されたこの度の「山梨百景」は、すべて10号で、水彩です。山梨というテーマ、そして全容を語るにふさわしい100点という作品の数、さらには油よりも保存がきく水彩であることもふくめて、この大きなお仕事はきっと将来に残されていくものと信じていますよ。

山田　光栄です。

早野　県民の財産であるとも思っています。多くの人が、山田耕三に注目していれば山梨の文化の明日が見える、と言います。どうか、これからも健康に留意され、ご活躍ください。

［構成：三神　弘］

山梨百景

旧甲府駅（1983年）53.0×40.9 P10号

波寄せる河口湖の富士（1985年）53.0×40.9 P10号

思う―牧場の春（1982年）53.0×40.9 P10号

思う―牧場の春

野に出てみると、弾むような春の明るさである。薬屋根に鮮やかな鯉のぼりの風物詩は、いかにも懐かしい。娘が幼い頃、よくせがまれて自転車で遠くまで鯉のぼり見物に行ったことなど思いだして、ふと心がなごむ。カメラのフィルムとジュースを求めて、穴山橋付近の河原に下りる。雪どけの水は春の甘色で、ゆったりと流れているようだが瀬音は意外と高い。

牧原の国道一二号線交差点を左折して、甲斐駒がくっきり青空に映えるゴルフ場への道を行く。真原地区への雑木林を抜けると、突然一満開の桜並木が迎えてくれた。桜並木の正面に甲斐駒が見える。太陽は真上に燦々と春を包み、自然の至福はここに極まれり。

人の気配さえなく、唐松の芽ふき、こぶしの花、水仙の群れ、桜、桃、すもも、山鳩、うぐいす、静けさ、雲雀、蝶々、てんとう虫等々。いま私たちの周辺から失われようとする総てが存在する。

駒ヶ岳は逆光の中にあって、前山も深い藍色の屏風と化す。桜並木をはずれる左側木立の中に斉藤牧場が、五月の色を濃くしてある。

畑のふちに腰かけて持参の弁当を頬張る。ふと見ると、かたわらの弁当の蓋に数匹の蟻がじっとたかっている。大自然の中では、人間も蟻ン子も同格でしかない。人間はとかく自然の支配者のように振るまう。人間そのものが自然の一員なのだ。弁当の蓋が風に飛ばされないよう、そっと小石を乗せてやる。

武川村（スケッチ・一九八二年春）

最近世間を騒がせている企業不祥事
その原因解明と企業倫理の確立のために…

企業不祥事と企業倫理の確立

第一幕
野村・第一勧銀事件

最近、企業の非倫理性についての報道をよく目にする。そのなかでも野村・第一勧銀事件は今年の上半期、世の関心を集めた重大事件であった。そして周知のように、山一證券にも同様の疑惑が波及している。

野村、第一勧銀、山一の事件とも、事件発覚の時期（というよりも発覚の経緯となる捜査）が共通していること、小池隆一容疑者という共通の総会屋に絡んだ事件であったこと以外にも、いくつかの共通点を有している。

組織内のある個人に責任を押し付けようと試みつつ（＝総務担当者が「個人ぐるみ」でやったのだと隠蔽しつつ）、実態は経営トップも含む組織ぐるみの犯罪であった。また、各社は資料を廃棄して証拠を隠滅しようとした。このように事件内容もさることながら、発覚後の対応からは企業倫理のかけらも見られない。

財界の総本山とでも言うべき経団連は、第一勧業銀行と野村證券への処分を「除名」ではなく「活動自粛12ヶ月間」にとどめた。それに比べて、甲府商工会議所が今年6月の創立88周年大会で「企業倫理の徹底」「市場原理の自覚、自己責任と自助努力」を打ち出したことは注目に値する。

第二幕
最近の不祥事の系譜とその原因

リクルート事件（1988年）から数えても、住専問題（1995年）、高島屋商法違反事件（1996年）、野村・第一勧銀事件（1997年）と、企業の倫理欠如による問題は連綿として続いている。（年はすべて最初の逮捕者発生時点）

では、このような最近の企業不祥事はいったい何処に原因があるのだろうか？

◇

経済広報センターが全国の会員サラリーマン1000人を対象に不祥事の原因（複数回答）をアンケートした結果によれば、上位回答は「問題はあっても指摘しにくい企業風土・体質がある」（54％）、「経営者の自覚が乏しい」（53％）、「企業倫理、企業行動基準が明確でない」（37％）であった。

◇

佐和隆光氏は、半尾治朗氏との対談の中で「企業倫理や官僚倫理が干からびたのはバブル経済期のことですよ。（中略）倫理はおいそれとは正常化しない。それが企業不祥事の一番の原因じゃないか。」と指摘している。しかし、バブル期の倫理面が他の時期に比べて劣っていたとの分析は鋭いが、バブルにすべての悪を背負わすといった論になるならば、バブル期以前に実際に起きた非倫理的な事件、すなわち薬害エイズ問題、リクルート事件、およびロッキード事件に象徴されるような、政治的な非倫理的事件が生じたことを説明できなくなりはしないだろうか。

◇

そこで、われわれはまず主たる原因として企業と総会屋が持ちつ持たれつの関係にあることをあげたい。総会屋が企業の弱みを握って企業に食い込んでくることもあるが、企業が総会屋を利用していく一面もある。そしてこの腐れ縁関係が長い間続き、それがなかなか断ち切れないということである。（ミクロ的要因）

第二の要因として、戦後の日本的経営が行き詰まり、転換点を迎えていることを指摘したい。終身雇用・年功序列・企業別組合を核とする日本的経営、政・官・財の閉鎖的なもたれあい構造は、十分な持続的成長が達成できる時期に適した経済システムであり、現在のような成熟化低成長社会においては様々な面で不整合さが露出しつつあるのである。（社会的ないしマクロ的要因）

第三幕
企業倫理確立のために

ところで、先に引用したアンケートで、企業倫理自体が不明確であることを企業の不祥事の原因とした回答が上位に位置していることが示しているように、そもそも「企業倫理」とは何なのか自体が漠然としているのである（一時期よく言われた「政治倫理」確立の問題を勞鬻させる）。企業倫理の概念自体を考察する必要があるだろう。

企業倫理は、ただ単に法律を破らない（don't commit a crime）という消極的正義のみならず、良き倫理規範に基づき、道徳的にも罪を犯さない（don't commit a sin）という積極的正義も含む。そして、総会屋などの闇の勢力との腐れ縁関係を断ち切るには、企業の社会的責任を自覚した経営者と社員が日常の場でそのような倫理を確立しながら、彼らに対して毅然とした言動をとっていくことが必要ではないだろうか。

しかし、ミクロ経済主体としての企業が毅然たる態度を確立したとしても、社会構造の変化に起因するマクロ的要因の問題はそれだけでは解決しない。企業倫理確立の問題は、われわれ個々人の社会経済環境に対する理解の深化をも要請しているのである。

［文：小西順人］

事業内容
- 一般貸切輸送…一般、常用、専属
- 重量品輸送…取り付け、取り外し搬出入作業
- 入出荷請負…荷造り、梱包作業、出向代行業務
- 引越輸送…事務所・工場の移転、ご家族のお引越等
- JRコンテナ輸送取り扱い
- 一般貨物全国定期便 ●宅配便 ●航空便取り扱い
- 生命保険の募集及び損害保険代理業

甲府通運株式会社

本社 〒409-38 山梨県中巨摩郡田富町流通団地3329-1
TEL.0552-73-0611 FAX.0552-73-9332
田富営業所 〒409-38 山梨県中巨摩郡田富町流通団地3211-14
TEL.0552-73-5471 FAX.0552-73-6277
東京営業所 〒174 東京都板橋区東坂下2-3-10
TEL.03-3967-6001 FAX.03-3967-6124

企業ウォッチング

甲霊社

取締役社長
大久保 和也 氏
おおくぼ かずや

●甲霊社データ●

昭和39年、セントラル交通株式会社が創業。その年の12月にグループ会社として甲霊社を設立。霊柩搬送、および祭壇の設営や役所の手続き、法要の進行など、葬祭に関わるいっさいの業務を行なう。資本金2000万円。
平成9年4月、古上条町に斎場・甲府セントラルホールをオープンさせた。30人収容、10名宿泊可。40台の駐車スペースで、低料金が好評を得ている。
本社〒400 山梨県甲府市塩部2−2−14 TEL 0552(52)4141

積極的に新規顧客を開拓する"責めの商売"が世間の大半を占める中で、葬祭業はいわば"待ちの商売"。

「私たちは、お葬式というものが本来、死者を悼むセレモニーであることを忘れずに、慎みの気持ちを絶えず持ち続けていたいのです。もちろん、ご用命いただいたなら、誠心誠意、当たらせていただきます」大久保社長のゆっくりと力強い語り口は、何よりも信頼感を抱かせるものだった。

真面目一貫で当たるしかない

セントラル交通が霊柩搬送を始めたのは、昭和39年。甲府市役所に、霊柩車が1台しかなかった時代だ。まずは5月に霊柩車稼働の認可を受け、その年の暮れには葬儀も行なうようになった。葬儀社としての「甲霊社」の発足だった。「ひと昔前は村という共同体が存在して、隣保組が執り行なっていたことを、代わりに葬儀屋という会社が引き受ける時代になったんです。会社が業務として行なうからには適当なことはできません」大久保社長は、身を乗り出すようにして熱心に話を続けた。「突発的で、しかも継続性のない特殊な仕事柄、お客様に信頼していただくことが第一なんです。そのためには、真面目一貫で業務に当たるしかありません。語弊があるようでしたら申し訳ないんですが、私達にとってみればそのいっときが真剣勝負なんです」。

大々的にTVCMを流したり、大がかりな会員の獲得を展開している同業他社もあるが、甲霊社はあえてそれをしない。そのせいか、後手に回ってしまう時もあるらしい。例えば料金設定。「お客様はパンフレットの価格表に載っている数字だけで判断しますが、その数字に、一体何が含まれているかということは、説明しないとわからないんですよね。本当は最終段階でいくらかかったかを比べていただければ一番いいんですが…」大久保社長の誠実さが、小細工してでも儲けようという横着な行為をできなくさせているのだ。

大事なのは、どれだけ真心を尽くせるか

「これまで地道に努力を重ねてきましたが、地元で営業を行なう会社としてのスタンスは守り続けていくつもりです。お客様にこれだけの予算でやって欲しいと頼まれれば、ウチはその通り足を出さないように約束しています。地元に根を下ろしている会社だからこそ、できることではないでしょうか」。平均年齢45歳という10人のスタッフは、経験も10年以上、ベテランぞろいだ。電話連絡を受けた社員が即、その家の担当者となる。別の人間を派遣しないのは、少しでもお客様に不安を与えないためという。誰が受けても充分に対応できる証でもある。「葬祭業もサービス業のひとつです。サービスという言葉に奉仕とか世話といった意味がありますが、ウチはまさにその通り。ウチの商品はサービスなんです。具体的にいえば、搬送車であったり、人手であったり、関連用品ですね。そしてそれプラス真心。目に見えず、計れないサービスだからこそ、私は最も重要だと考えています」。

確かに心は計れない。しかし、真心が尽くされているかどうかは、人には敏感にわかるものだ。

「この仕事をしてると休みはないんです。いつでも飛び出せる体制でいないとならないですから、酒も飲めませんよ」恰幅のいい大久保社長が、優しい笑顔をほころばせた。

いついかなる時も、お客様に対して良心的に接する甲霊社は、これからますます信頼を高めてゆくに違いない。

［取材：原田陽子］

一元流グループ

自分の持っているものを何か生かせないか
ピュアな気持ちで考えたら
いつのまにか人を喜ばせる事にたどり着いていた

今突然、自分に粘土が与えられたと考えてください。まるで色鉛筆のようにカラフルな粘土がいくつもです。さぁ、あなたならどうしますか。

粘土遊びなんて子供じみている、と見向きもしませんか。それとも好奇心に駆られて思わず手にしてしまいますか。中にはとりあえず閉まって置くという方も、いるかもしれませんね。

粘土は所詮、粘土でしかないけれど、何か別のものに形を変えることができる"可能性"を持っています。
では粘土を人生に置き換えたらどうでしょう。なぁんだ人生か、人生なんてつまらないと捨て去りますか？

それとも、その"可能性"に興味を抱いて、何らかのアクションを起こしてみるでしょうか。

今回は、アクションを起こし続けて見事すばらしい"可能性"を開花させてきた方をご紹介します。

「切手はり絵を通じて社会に役立つことができたら…」と広瀬さん

まさかここまで発展するとは 予想しなかった展開に自分でも驚くほど

切手はり絵では、全国でも第一人者の広瀬元一さん。「戦後間もなく、友人と手紙のやりとりをするうちに、初めて目にするような切手に心を奪われたのが、収集のきっかけです」その後、会社を定年退職し、みかん箱いっぱいに集めた切手を何とか使えないかということで、この世界に飛び込んだそうだ。切手はり絵の手法を独学で学び、17年前に"一元流"を開いた。

個展やチャリティに何度となく出品するうちに、'87年には国際芸術文化勲章を、'97年には世界平和文化栄誉章を受賞、またパリ平和展のポールアンビュー賞やローマ国際美術博グレゴリアン賞を受けるなど、海外でも幅広く活躍している。

「下手の横好きと申しますか、まさかここまで発展するとは思わなかった」と話す広瀬さん。

創作活動の合間を縫っては、子供の広場や朝日老人大学など、数多くの場で子供やお年寄り達に、はり絵の指導を行なってきた。朝日老人大学では、学長を務め、手工芸部の講義も受け持つ。他にも石和町の社会福祉協議会や甲府市の共立病院などでボランティア活動に協力している。お忙しくて大変でしょう？と聞くと「自分が少しでも社会に対してプラスになるような行動がとれれば、というのがひとつ。指先や頭を使うことで神経の活性化のお手伝いができれば、というのもひとつ。もうひとつは、人との交流が広がるところに魅力を感じてね」という小気味よい返事が戻ってきた。

「会わせ鏡」

人生の一瞬一瞬を大切にするように はり絵のひと貼りひと貼りにも心を込めて

そうは言っても根気がないと続かない。まず切手のはり絵に関心を持つ人というのは、水彩や油絵の1割か、あるいは5分ぐらいしかいないらしい。そのうえ、材料（古切手）がすぐには集まらないので、挫折してしまう人が多いそうだ。

「昭和60年頃からですか、だんだん多色刷りで極彩色のものが多くなりましてね、扱いにくくなったんですよ」つまり、使えるようにするには、今まで以上に細かく切って色分けしなければならないわけだ。面倒がってその作業を粗雑にすれば、仕上がりにいい色が表わせない。それこそ、気力がないと到底無理な事だ。

「語らい」

「切手収集の愛好家の間では、私のように切手を切り刻んではり絵を作る者に対して、邪道だとか異端者だとかいう声もあるんですけれども、私としては出来る限り、自分の持っている技術に対して、お声がかかれば、いつでもどこへでも行ってボランティアしたいと思っています」。

広瀬さんの、切手を通じて社会奉仕をしたいという強い熱意が伝わってくる。

今まで通算20時間くらいぶっ通しでしても平気だったという広瀬さん。自分の創作活動のために最近は、朝5時から8時までの一番静かで気持ちのいい時間帯を当てているという。

ひと貼りひと貼りしていくはり絵は、どこか人生に似てるのは気のせいだろうか。心を込めて丁寧に新しいチップを付け加えてゆけばこそ、すばらしい作品が出来上がる。得るものも大きい。

この夏80歳を迎えた広瀬さんの言葉が印象に残った。

「健康である限り、一瞬一瞬を大切にしていきたい」。

まさに広瀬さん自身の人生を語る格言のようだった。

〔文：原田陽子〕

◆一元グループ◆

古切手を素材とし切手はり絵でボランティア活動を行なう団体の総称。メンバーは約60人ほど。1985年に発足した。"一元"とは、広瀬さんの名前を逆さにしたことに加え、鎌倉初期の禅僧・道元の言葉「方円は一元に帰す」（四角形や円はどこから書き始めても必ず書き始めの位置に戻ることから、初心を忘れずに）という意味が込められている。

連絡先（代表）：広瀬元一
〒400 甲府市宝2－9－13
TEL 0552－22－2641

早野グループ4社から
一番ホットな情報をお届けします

「トヨタホーム統一工場見学会」開催

トヨタホームでは来る10月25日（土）に、全国統一の工場見学会を開催致します。場所は春日井・栃木・山梨の、全国で3ヶ所にあるトヨタホームの住宅生産工場です。

当日はトヨタホームの住宅生産ラインはもちろん、据付けの実演や最新テクノロジーコーナー、外壁の耐火実験などの見学の中で、トヨタホームの強さの秘密をお教えします。

工場は現在住まいの85%を生産している、最新鋭の設備を誇るものです。半世紀におよぶクルマづくりで培った、技術とノウハウ、それを活かした数々の最新メカニズムを、ご自身の目でお確かめください。

皆様のご来場を社員一同心よりお待ちしております。

トヨタ自動車㈱　山梨事業所

工場見学をお申込の方は、下記までご連絡下さい。

トヨタホーム山梨（株）
本社：中巨摩郡昭和町河西1043　℡0552・75・1234　FAX0552・75・7806

定年を迎えるにあたり…経理係長　橋本うた子

当社の定年は満60才の誕生日です。かつて大勢の定年退職者を送りましたが、高校を卒業後新卒で入社、そして定年を迎えたのは、9月20日をもって退職した橋本うた子さんが女性では初めてです。そこで橋本さんに雑感を聞いてみました。

Q.昭和31年4月に入社して以来41年間ご苦労さまでした。定年を迎えるにあたり今の気持ちは「仕事を無事に終えることができ、安堵感でいっぱいです」**Q.入社当時の甲府通運(株)八日町営業所はどんな様子でしたか**「甲府市の八日町で建物は廃校になった簿記学校を利用していました。床が落ちていたりガラスは割れていたりで、決してきれいではありませんでした」**Q.当時の人数は…?**「事務所では故白木前社長、瀬田専務、それに私と運転手が4人でした。営業所は社員が少なかったので忙しい時は前社長も含め皆で集荷をすることもありました」**Q.その後はどんな様子でしたか**「八日町から三日町、昭和36年に朝気へと移転するようになってからは社員も増えましたが、女性は多くても3人くらいでした。54年に現在の田富町に移ってから女性の採用も増え、今に至っています」

お話の中で短時間ではとても語り尽くせない歴史を感じました。3人のお子様を育てながら働き続けた橋本さん。これからは女性社員の先達としても、ご指導を頂きたいものです。

長々と居すわりおりし我身にも
この日を告ぐる秋の訪れ…橋本うた子

甲府通運（株）
本社：中巨摩郡田富町流通団地3329・1　TEL0552・73・0611

下大鳥居が優良工事表彰

当社土木部の下大鳥居排水樋管改築工事が、建設省関東地方建設局甲府工事事務所の平成8年度優良工事に選ばれました。表彰式は平成9年7月25日に甲府のニュー芙蓉で行われ、甲府工事事務所の山田所長より表彰状を授与されました。概要は次の通りです。

工 事 名：下大鳥居排水樋管改築工事
工事場所：西八代郡市川大門町下大鳥居地先
工　　期：平成7年11月2日～平成8年6月15日
統括責任者：立川正文
現場代理人：笠井雅史
現場担当者：鈴木博行、河西英喜、国本賢一

樋管とは、堤防の下を横断して、暗渠構造物の形として設けられた工作物で、暗渠断面の大きいものを樋門といい、樋門の断面の小さいものを樋管といいます。

（株）早野組
本社：甲府市東光寺1-4-10　TEL0552・35・1111

生まれ変わったアリストにご注目下さい

アリストがさらに魅力的に変わりました。

◆プロポーション

全長は従来型に比べ、115mmダウンサイジング。安定感あるロングホイールベースと、ショートオーバーハンギング。十分なゆとりを感じさせるルーフの高い大きなキャビン。「走り」だけでなく快適性も追求した、"これからのスポーツセダンスタイル"を確立しました。

◆運動性能

重量物をできるだけクルマの旋回軸に近づけ、ハンドリングの特性をニュートラルにし、的確な操縦性を実現。4輪にかかる荷重をより均一にするために、前後の重量配分をほぼ理想に近いバランスで達成しました。こうした原点に立ち返った取り組みが他を圧倒する走りを支えています。

◆快適性

従来型に比べヘッドクリアランスは前席で10mm、後席で20mm、アクセルペダルからリヤヒップポイントまでは25mmのアップ。ロングツーリングやさまざまな条件下での走りに呼応できる居住性は数値でもはっきりと表れています。大きなゆとりと開放感をお楽しみ下さい。

トヨタビスタ山梨（株）
本社：甲府市朝気3丁目10・21　TEL0552・32・5511

果王のパイオニアとして
日本的に大きな足跡を残しながら
なぜか郷里から見捨てられていた人

小沢　善兵衛
（おざわぜんべい）

上野　晴朗
うえの　はるお
1923年山梨市生まれ　歴史家・作家　県立図書館郷土資料室を経て67年から文筆活動に入る　著書に「甲斐武田氏」等多数

幕末・維新の黎明期から明治期へかけて、日本の果王（ぶどう）のパイオニアとして活躍した人に、小沢善兵衛（のち善平）という特筆すべき人物がいる。今回はこの人を紹介してみよう。

小沢善兵衛は天保11年（1840）勝沼町綿塚に生まれた。明治37年（1904）、65歳まで生きた人で、日本の新産業としてのぶどう作りと、ワイン産業の発展に偉大な貢献をした。

善兵衛が20歳前後、日本は長い間の鎖国を解き、関東では横浜港が開かれ、諸外国との貿易が始まった。それに刺激された善兵衛は、綿塚から甲州産の生糸荷を担いで横浜に出向き、外国商人に売りさばいて利益を上げ、間もなく横浜に住みついて、浜師（生糸、蚕種などを仕切る商人）として活躍するようになった。

とくに生糸と蚕種は横浜貿易の花形だった。日本の生糸や蚕種がとくにもてはやされたのは、ヨーロッパの養蚕地の地中海の沿岸地方に微粒子病が蔓延し、絹織物業者がその原料を東洋に求めねばならない事態が持ち上がっていたからだった。

ところがこの生糸・養蚕の好景気に目をつけた幕府が、利益を一手に握ろうとして取り締りを強化、横浜に集まる生糸商達が苦しめられる結果になった。注目すべきは英語やフランス語を

晩年の小沢善兵衛

覚えた善兵衛が、浜師として生糸商達の信望をうけて、この難局を乗り越えようと努力し、投獄されたり、ついには国禁を犯して仲買商達が集めた生糸荷をもって、フランスの工業都市リヨンにまで直貿易に出かけるなどの活躍を続けたことである。

しかしまだ鎖国時代だったので、法を犯したというので官憲から追われ、横浜にいたヴァン・リードの仲介で、ついに妻子をともなってアメリカに逃げ、西部劇で有名なカリフォルニアのナパに入って開拓に従事した。

しかも日本産の桑や茶苗を大陸に持っていき、養蚕業や茶業を興そうと試みたのであるからすごい人物である。しかしこの事業は失敗し、妻子を失ってしまう。

やがて明治に入り、祖国日本にもようやく新政府が誕生し、諸外国との国交が重視されるようになった。そして明治4年（1871）12月、右大臣岩倉具視の率いる特命全権使節団がアメリカに渡航してきた。

その一行を迎えに出た小沢善兵衛に対して使節団は、密航の旧罪はすべて消滅したのですみやかに日本に帰って、そのアメリカで得た新知識を活かして、日本の農政や開拓行政を推進し、欧米から新種の野菜や果物を輸入してもらいたいと要請をうけた。

そこで善兵衛は祖国日本に帰ることを決意し、ぶどう栽培やワイン醸造の研究に磨きをかけて、明治6年10月（1873）ついに横浜に帰ってきた。そしてすぐ東京下谷区谷中清水町に撰種園という農園をひらいた。

安政6年開港された横浜港の光景

カリフォルニア・カリストカ村の大地に立つ小沢善兵衛一家
勝沼町ぶどうの国文化館に展示した蝋人形

ときあたかも日本の文明開化が始まろうとしており、殖産興業政策が花開き、明治10年（1877）第1回内国勧業博覧会が東京上野公園で華々しく開催された。たまたま善兵衛の開いた撰種園がちょうどその隣接地にあったため、善兵衛がアメリカから持ち帰り、あるいは輸入した果樹園芸の数々の新種が注目をうけた。

この結果、善兵衛は文明開化の農芸の旗手として一挙にその名声が高まったのである。なかでもアメリカのカリフォルニアから輸入したぶどうの種類は、この撰種園から日本全国に広まることになった。大蔵省所属の農事試験場、あるいは開拓使庁、三田育種場などにも関係をもち、欧米からたくさんの園芸用品種を輸入してやった。

さらに善兵衛は終生の夢として、自らも一大ぶどう園を拓こうと企図し、明治17年（1884）ころから土地を物色し、群馬県の妙義山麓についに候補地を見つけて、明治22年（1889）妙義町大字諸戸の官有地を払い下げてもらい一大ぶどう園を興した。

主としてアメリカ産のデラウエア、ナイヤガラ、コンコード、イサベラなどの数百種類である。その苗を植えつけ、土壌の研究、接木の技術研究、あるいは肥料、気候風土の研究などをすすめて、海外の農業技術の普及につとめた。

また明治10年には『葡萄培養法摘要』を著して、ぶどうの普及と発達に貢献しているのである。

また上野谷中の撰種園でも妙義のぶどう園でも、伝習生を全国から募集して農業技術の普及につとめている。

明治期以後、「ぶどうの父」などと仰がれるようになった新潟県の岩の原葡萄園の川上善兵衛は、撰種園小沢善兵衛の伝習生のひとりで、外来種ぶどうの研究方法を伝授され、のちに名声を博するようになるのである。

また山梨県牛奥村（塩山市）の出身で、「デラウエアの父」などといわれて頌徳碑が建てられている雨宮竹輔も善兵衛の伝習生のひとりであった。

デラウエアは勿論、小沢善兵衛がアメリカから持ち帰り苦心して広めたもので、「ぶどうの父」とか、「デラウエアの父」とかいう言葉は実は小沢善兵衛に捧げられるべき言葉なのである。

しかしアメリカから帰国後、籍を山梨から東京に移してしまい、東京谷中の人と多く記録されていたため、郷里から完全に遊離してしまったのである。そしてその後は妙義山麓のぶどう園だけになってしまったから、ますます生れ故郷山梨とかけ離れてしまった。

いま妙義山諸戸に行ってみると、かつてのぶどう園のかたわらに善兵衛が若いときアメリカから持ち帰ったアメリカショウナンボクが一本亭々とそびえている。

私はそんな故郷から全く見忘れられた小沢善兵衛の苦闘と夢の世界を、勝沼町ぶどうの国文化館の中に、ロウ人形として初めて公開した。

カリフォルニアの大地に立つ親子3人を故郷の人々にどうしても知ってもらいたかったのである。だが果してどのように迎えてくれるであろうか心配である。善兵衛が故郷の戸籍を完全に消し去り、名を善平と改めたのは、愛する妻子の死の痛手から逃れたかったからであるが、故郷に渦巻く柵からも遊離したかったからであろう。

ボクの美術品観察日記 7

ムンクの描く影は不気味だ

山本 育夫
やまもと　いくお
ミュージアム・マガジンDOME（ドーム）／美術品観察AW（エイ・ダブリュ）／美術批評・展覧会批評誌LR（エル・アール）編集長
週刊朝日に展覧会批評連載中

初々しい眼差し

*ムンクといえば、「叫び」が有名。このムンクの「叫び」人形がヒットして、デパートやミュージアム・ショップで売れている。セゾン美術館や、水戸芸術館のミュージアム・ショップなどで実物を見たが、口で空気を吹き込むスタイルのこの人形、大小さまざまな大きさがあり、たとえば、訪ねてきた恋人がドアを開けると、この人形が立っていてギョッとする、というような使い方が一般的であるという（本当?）。ムンクの実物の絵にある、ある種の恐怖感のようなものが抜け落ちていて、誠に愛らしい。

図版の作品はそのムンクの、もう一点の人気作『思春期』。まだ成熟した体つきになっていない少女が、ベットに座って正面を見据えている。見開かれた眼、ひざの上に重ねられた腕。解説によると初潮を迎えた少女の、不安な心情を表しているということになるのだが、確かにそうした初々しさが画面全体にはりつめている。

実はこの作品は1885年から6年にかけて描かれた作品だった。ところが保管していた倉庫が火事になり焼失してしまったので、それから10年ほどたってから、ベルリンで新しいモデルを使って再制作された作品だという。

浮き上がって見える影?

ところでこの絵、少しでも絵を描いたことのある人ならすぐに気づくことだが、少女の影が少し奇妙なのだ。ベッドの上のシーツから後の壁にまで届いている影が、きちんとそれぞれに張り付いている感じがしない。なにやら影が独自に浮き上がっているように見える。意志を持って浮き上がった霊のようにも見えてしまう。さらによく見ると、少女の体のまわりにも、オーラのような不思議なタッチが見える。体全体を気のようなものが包んでいるようにも見えてくるのだ。もし、そんなふうに見えた人がいたとするならば、その人はもうムンクの世界に引き込まれた証拠である。

ではこうしたムンクの影はどういう経過で生まれてきたのだろう。

カメラとムンク

ムンクは大のカメラマニアで、いつも小型カメラを持ち歩いていたという。ムンクの絵の多くは、このカメラで撮影された写真を元にして描かれていたのだ。そのムンクの写真を、世田谷美術館で行われた「ムンク展」の折、見ることができたのだが、これがまた実に奇妙な写真なのだ。わかりやすい例を引くと、「心霊写真」に酷似している。

どうしてそんな写真をムンクが撮ったのかというと、一つは専門的な技術など勉強しなかったせいらしいが、もうひとつは、どうやら、だからこそ無手勝流でプロの写真家にはマネのできない写真が撮れたということらしい。

ムンクの写真には、広角レンズで自分の鼻が誇張されたような写真や、二重露光で背景にぼんやりと幽霊のようなムンク自身が写っている写真、なにやらピンボケで煙のようなものが写っている写真など、実に興味深い写真が残されている。もちろん、自分の絵のモチーフを実際に写真で撮って、作画に利用するという、本来の使い方の方が多いのではあるけれど。

影がものを言う?

ところで、ムンクの少女の影。この影はこうした写真に現れている不思議な霊魂のようなモチーフを、ムンクが意識的に絵のなかに導入したものらしい。いやあるいはその反対で、ムンクはもともとそうしたものに異常に魅かれる性質を持っていて、その性質が前述したような写真を撮らせたり、絵を描かせたりしたのかもしれない。

年譜を開いてみると、ムンクがこの絵を最初に描いたのは22歳の時。このころムンクの絵は、国が主催する展覧会で酷評されていたらしい。次にこの絵を再制作した30代には、妹が精神病院に入院していたり、弟が死亡したりで、ムンクの精神はかなりハードな状態だった。事実ムンクはやがてアルコール中毒となり、40代には被害妄想や強迫観念に取りつかれるようになり、45歳の年にはついに精神病院に入院する。

ムンクの作風はそうした現実的な経過の中から生まれ出たものであり、ある意味ではまさに命懸けで表現をしていたことがわかるのだが、そうであるからこそこの少女の影も、衝撃力をもって感じられるのだ。影を描きながらムンクは、あたかも影が少女の体内からいままさに抜け出そうとしている霊魂のように感じていたにちがいない。影は人の生命の中心に存在している真実のようなもので、その真実が少女の中から抜け出そうとしている。この初々しい少女も、また、汚れた存在へと落ちていくのだとでもいいたそうなムンクではある。

長生きしたムンク

精神的にかなり不安定なムンクではあったが、しかし、ムンクは長生きだった。作品はいろいろな美術館にコレクションされ、さまざまな勲章も貰っている。驚いたことに生涯に千点もの絵画を制作しているのだ。ムンクは八十一歳で心臓発作のため亡くなったが、画家としてはよくぞこの年まで描きつづけたというべきであろう。

晩年、ムンクの絵はナチス・ヒトラーにより頽廃（たいはい）芸術と名指しされて没収されるという「事件」に出会うが、いまとなってみればそれもまた、ムンクのもうひとつの「勲章」となった。「叫び」のムンクと、「影」のムンク。いずれのムンクも一度見たら脳裏に焼き付いてしまうのが、すごいし、いささか怖い。

エドヴァルド・ムンク『思春期』
1894-1895年制作・油彩・カンヴァス
オスロ国立美術館所

*ムンク（1863～1944）：ノルウェーの画家。表現派の先駆。「叫び」などが有名。

スポーツの秋

何事も“基本はまず形から”スポーツするならファッションもカッコよく決めたい!!

さぁ、秋です。秋と言えば思いつくのは？芸術の秋。スポーツの秋。そして夜長を楽しむには、そうそうやっぱり読書の秋ですよね。誰ですかぁ、食欲の秋！って一番最初に元気良く答えたのは。そんなことだから、ほら、お腹の辺りが膨んできちゃうんですよ。

時の経つのは早いもので、'97年もあと3ヶ月となりました。忘れてならないのはその分しっかり年もとっているということ。いつまでもハツラツと明るい人生を送りたいなら、気持ちを若く保ちましょ。それにはスポーツで体力もつけなくちゃ。まずはファッション(形)からバッチリ決めて、楽しくスポーツに親しむのが長続きの秘訣です。

「'96年ナイキブーム」はこうしてつくられた

昨年は空前の「ナイキブーム」の年でした。

今でこそ、前園真聖だのタイガー・ウッズだのと、目立つ選手は必ずといっていいほどナイキブランドの広告塔となってますよね。でもこれほど世界的に浸透するまでには20年以上もの歳月がかかっているんです。

最初のナイキブームの火付け役となったのはマイケル・ジョーダン。'85年のことです。シューズのソール(かかと部分)に「エア」を入れ、クッション性を高めた商品は、彼が履くことで「エア・ジョーダン」と名付けられ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ…とモデルを重ねるごとに子供たちの間で人気を獲得していきました。'87年には、「エア」が外から見えるよう、ソールの横に窓を開けた「エア・マックス」も登場。日本では'96年後半頃からナイキのスニーカーを履いていた人が恐喝・強奪される事件が相次ぎ「マックス狩り」という言葉も生まれましたね。専売特許「エア」の性能もすごいですが、同時にデザイン性も

人気のモデル「AIR MAX98」

画期的、しかも一流選手の中で特にスーパーヒーローと言われる人とのみ、契約を結んでのマーケティング戦略は、見事に当たりました。

'90年代後半からアジア市場を重視し始めたナイキは、これまでの陸上やバスケットボールに限らず、野球、ゴルフ、サッカー、テニスといった新分野でもシューズをデザイン化。小売店から半年前に注文を取り、返品を一切受け付けない「フューチャー・オーダーシステム」が、ナイキのスニーカーにさらにプレミアムを付けてきたのです。

こうして勝利と栄光のシンボルとして人々の憧れになったナイキの「スウッシュマーク」。

シューズの他にも、キャップに、Tシャツに、短パンにソックスにと、よりどりみどり。あなたなら、どんなふうに着こなしますか？

カラフル、パワフル、ワンダフルどれにしようか迷っちゃう

シューズにスポットを当ててみると、ナイキの圧倒的な商品パワーに押され気味だった他社ブランドが、今年に入り急激に売り上げを伸ばしています。例えば「ニューバランス」。ナイキの人気モデルが、大ぶりでカラフルなデザイン(価格は15000円以上)なのを逆手にとり、ナチュラルでベーシックな色使い、手の届きやすい価格設定(5200円)で、女子高生の通学履きの定番となりました。また「アシックス」は今年4月、トレードマークの4本ラインを思いきって外したら、好調な売れ行きなのだそう。靴屋さんをのぞいてみると、スター(星型)がトレードマークの「コンバース」を始め、「リーボック」や「ミズノ」「プーマ」など、他にも蛍光色やメッシュで凝ったデザインのシューズばかり。しかも、ナイキに劣らない性能というから、お気に入りの一足を探すのも楽しみです。

スポーツをするしないに関わらず、普段着に気軽に合わせて履いてみましょう。スニーカーはもうファッションの一部なんですから。足取りが軽くなったら、きっと今までにない素敵な秋を見つけられるかもしれませんよ。

LET'S TRY!!　JUST DO IT!!

こんなところに山梨 思いがけない場面でふるさと再発見

子供の世界がゆがんでいるという。非行が目立ち、登校拒否も増えているという。これらはすべて家庭のあり方に根ざしているともいう。こうした指摘を受けて、家庭のことは外で喋らないことを旨としているお父さんも、余所の家庭が気になりはじめる。つい同僚に「家族揃って食事をするのは週何回？」「子供の担任の先生の名前知ってる？」などと訊ねて、妙な顔をされてしまう。

そこで、ひと昔の家庭とは、父親とはどのようなものであったのかを学ぶべく、家庭をテーマした作品の多い向田邦子の本を手にする。

戦争中のことである。昭和20年3月の東京大空襲で、向田さんの一家は命からがらの目にあった。そのとき父親は、このまま一家が全滅するよりはと心に決め、妹を甲府に疎開されることにした。

その頃の甲府は、都会からの疎開者が急増していた。最も多かったのは縁故疎開だが、頼る先のない子供たち

甲府に疎開した娘の字のない葉書 向田邦子さんの父に学ぶ家庭と親子のあり方

は、閣議の決定による学童疎開の名のもとに集団で疎開した。

向田さんの父親はたくさんの葉書に自分の宛名を書き「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい」と妹に言い聞かせた。妹は小学校一年で、まだ字が書けなかった。妹は雑炊用のドンブリを抱えて、遠足にでも行くようにはしゃいで出掛けた。

最初の葉書には、はみ出すほどの大きなマルが赤エンピツで記されていた。カボチャの茎まで食べている東京に較べ、甲府は居心地のいい土地に違いないと父親は安心した。ところが次からの葉書のマルはしだいに小さくなっていき、とうとうバツになってしまった。

家族が会いに行くと、妹は校舎の壁に寄りかかり梅干しの種をしゃぶっていたが、種をペッと吐き出して泣いたという。妹が帰ってきたとき、茶の間に座っていた父親は裸足で飛びだし、妹を抱きかかえ大声で泣いたという。

向田さんも小学校3年の時、小児結核になりかけて入院した。このとき父親は、娘の回復を願って禁煙し、280日ぶりに登校するまでこの煙断ちを続け通したという。

さて、あなたの父親度はいかが？(石)

参考資料：向田邦子「眠る女」「ごはん」

Book

郷土から生まれた新しいお話「山梨の童話」

日本児童文学者協会 編

山梨にゆかりのある作家達による21の新しい郷土の童話と童謡集。「県別ふるさと童話館」のシリーズとして刊行された。作者の多くが新人で、児童文学の将来も展望できる。

編集委員で、解説も担当しているベテランの佐藤眞佐美の作品は「種まく人」。北巨摩郡高根町出身の浅川巧を取り上げ「韓国の山を、民芸を愛し、韓国人の心のなかに生きた日本人、ここ韓国の土となれり」と墓碑に刻まれ、いまも韓国で讃えられるその生き方をたどる。

日本が大韓帝国に軍隊を送りこみ、力ずくで植民地にしてしまおうとしていた時代のことである。浅川巧は朝鮮式の家に住み、朝鮮の言葉を話し、誰とでもわけへだてなく付き合った。熱心なクリスチャンでもあった。山に緑を取り戻す仕事をし、失われた朝鮮の陶器である高麗青磁の復元もした。さらに、自国の文化を守ることで民族の誇りを自覚させ、必ずや来る解放の日を信じさせた。

作者は「不幸な時代に、くもりのない目で物ごとをみつめ、差別や偏見とはかかわりない生き方をつらぬいた浅川巧こそ、世界の平和と人類の幸福に貢献する、真の国際親善の種をまいた人ではなかったか」と浅川巧に高い評価を寄せ、語り継ぐ。(川)

リブリオ出版　¥1,700

滝を見るハイキング

vol.3　雨畑川 見神の滝

写真と文 上野　巌

紅葉映える見神の滝

南アルプスの最奥部を水源とする長大な早川の最大の支流が雨畑川である。南ア南部の前衛の山々を水源とするのだが、その谷は深く、支流は数えきれないほどだ。そして早川の流れ以上に蛇行する様はすさまじい。

蛇行する雨畑川をいろどる紅葉

この雨畑川の左岸の谷筋一帯には、近世期を中心に発展した奥沢金山など五つの金山があり、最も栄えた17世紀頃には、「奥沢千軒」などと呼ばれた集落もあったという。それらは無論いまは廃絶して痕跡もなく、それどころか、雨畑地区そのものが過疎地として静まり返っているのが現状だ。

自然はしかし人間の営みなどには関係なく、いにしえからの美を保ち続けている。本流に不思議なほど高さを持つ滝のない雨畑川だが、雨畑湖のほとりを過ぎた硯の里、雨畑集落のすぐ先に、支流の樽沢から落ちる「見神の滝」がある。高度差42㍍をほとんど垂直に落下する様は、まったく素晴らしい。紅葉の最盛期なら滝の美は一段とまさる。

見神の滝は車で達してしまうので、湖畔まで戻って少し歩こう。馬場にある町営の施設、ヴィラ雨畑の横に車をおき、目の前に見える120㍍の吊橋を渡るのである。人造湖とは思えない奥深い山の湖の上を、ゆらゆらと揺れて歩くのも気持ちのいいものだ。渡り終えたら右に林の中を進む。

紅葉を映して静まり返る雨畑湖と吊橋

左手の七面山側から押し出した河原を歩く箇所があり、対岸の馬場と老平の集落がよく見える。また林の中に入って少し歩くと、町営の野鳥観察舎がある。秋では小鳥もあまり活発ではないだろうから、ここは湖を眺めながらの一休みに使わせてもらおう。

雨畑湖畔にある野鳥観察舎

［参考タイム］

県道雨畑入口―（車15分）→見神の滝

（車5分）

馬場―（吊橋を渡って往復40分）→野鳥観察舎

〈甲府通運のページ〉

昭和初期の自動車運送状況
早野組は鉄道荷物の取扱いから運送業へ

林　陽一郎
はやし　よういちろう
山梨県教育委員会・県史編纂文化財担当

トラックの販売広告（昭和4年山梨日日新聞掲載）

甲府通運株式会社の前身である甲府小運送自動車株式会社、さらにその前身である早野組は明治36年（1903）6月の中央東線の鉄道開通とともに塩山、甲府両停車場の鉄道貨物の積み下し業務に従事した。鉄道が岡谷まで延長されるにしたがってその取扱いも塩山―岡谷間と拡大されている。積み下し作業にともなって小荷物の集配業務も行われるようになるのは当然のこと、当時の鉄道荷物は内国通運株式会社が一手に引き受けていたため、早野組は内国通運の下請け的な営業であったのはもっともといわざるをえない。このときの運送は人のひく荷車と荷馬車が主力であった。山梨において貨物自動車が使用されるようになるのは大正時代に入ってからのことである。

昭和3年（1928）1月、甲府で発行された『開発』誌には「自動車運輸の状況」として本県の自動車に関する記事があるが「二.貨物運送」についてつぎのように書かれている。「貨物自動車運送の発達は、何れの地方に於いても殊に本県でも大震災（関東）后より非常に増加し来たり漸く其雄姿を現はし、漸次産業の発展、経済組織の変遷に伴い、吾人の社会生活の向上により需要関係が密接なりし為、逐年的に発達し来たので、現在の貨物自動車は、自家用三十五輌、営業用百十七輌計百五十二輌であって自家用はほとんど製糸家及各浴場の石炭、或肥料商の肥料其の他米穀雑貨を搬出する会社、大商店に専属するものが多い」

貨物自動車の種類と状態についてはつぎのように述べられているが、国産車の名はあがってきていない。

「貨物自動車の本県に於いて使用して居るものはほとんどフォードが経済的なる関係上最も多く総車数の九割以上を占めている、其の外シボレー、マック等は極く僅である。又これを重量瓲数別にすると、一瓲積以下百五十輌、一瓲半積二輌、計百五十二輌であって一瓲車が最も多く総輌の九割八分を占めている。なおその使用目的によって営業用貨物自動車を分類すると、小運送用と長距離用に使用せられ、又両用して居るものもありて皆鉄道の発着貨物並びに自家工場の燃料及生産品、転売品運搬に使用している。又営業用のものは小都市を中心として近郊運輸に従事して乃ち甲府市を中心として自家用十四輌、営業用二十四輌、計三十八輌の自動車が市内より郡部の自動車と相交へている」。

人力による荷車や、馬による荷馬車に比べてより大量に運搬出来る貨物自動車はその後増加、さらに明治四十年代からはじまった国産車の販売開始とともに自動車による貨物の運送は普及していく。

「営業用自動車は路線営業をなすものは未だ本県になく、出貨の移動にともなって随時随所に出仂するものであるが、大体同一路線を疾駆するもの多くほとんど路線営業と何ら変化はない」と初期の貨物運送の状況を述べているが、次回もこの昭和3年当時の貨物運送を追ってみる。

〈トヨタビスタ山梨のページ〉

“3年間で12万キロ”
全国にまたがる営業活動で
ただいまビスタが活躍中！

株式会社 日 向 宝 飾

今年の9月でちょうど創業20年を迎える日向宝飾。取材のご挨拶にと伺った本社事務所は、電話の取り次ぎをする女性社員やお客様の応対をする男性社員らで活気に溢れていた。

甲府で製造・加工された商品は、全国の小売店や卸へと納品される。常時、取り引きしている得意先は350社。他にも単発的に発注を受ける会社は数多くあり、それらを合わせると全部で500社に上るという。

「社員を預かっているからには、安定して商売していかないといけないんじゃないでしょうか」と社長の日向功さん。社員数32名。同業他社は山梨県内にも3000社以上あるが、日向宝飾のように売り上げを年々伸ばしている会社はそう多くはない。

「楽をして商売はできないといいますが、やはりコツコツと件数を増やしていくという、基本を忘れなかったことでしょうか。得意先を分散させていったのが良かったんですかね」と話す日向社長。一口に顧客を分散させるといっても、簡単なことではない。人手もかかるし、資金も寝る、リスクは多い。それでも、会社にとっては長期的な繁栄を実現するための必須事項なのだ。そういった意味でも経営者の先見性や判断力が非常に問われるところ、日向社長はそれを見事に果たしてきたのである。

日向宝飾で使用しているトヨタビスタの車は計7台。ビスタが5台、レジアスとターセルがそれぞれ1台だ。

専ら営業用で、関東を始めとし、北陸、関西、山陽と本州ならどこへでも車で行くという。「前は他社さんの車だったんですが、どうも故障しやすかったり、調子が悪いと社員からのクレームが多かったんですよね」。

だいたい3年間で12～13万Km乗ると聞けば、この会社でどれだけ車が活躍しているかがわかる。ビスタにしてからは、震動も少ないし、乗り心地が抜群だという。

「実際、動いてくれるのは営業ですからね、喜んでくれればそれに越したことはないですよ」。

社員のことを第一に考える日向社長。その笑顔に優しい人柄がにじみ出ているようだった。

〒400 甲府市上今井町1
TEL 0552—43—3141

〈トヨタホーム山梨のページ〉

確かな目が実現させた
家族みんなのお気に入りの家
“我が家に勝る所なし”

小泉晃治さん宅（竜王町）

にぎやかな通りから少し入ったところに、小泉さんのお宅はある。芝生の向こうに建つ大きな家。他には何も遮るもののない澄んだ空が、この家の美しい背景となり、一段と外観を引き立てていた。

トヨタホームの「フォーレ」。数あるシリーズの中でも、まさにトップクラスといわれる住宅だ。

三和電線工業株式会社で工場長をお務めの小泉さんには、家を新築するに当たって、基本的なコンセプトがあったという。それは「ゆったりと機能的であること」。1階にダイニング&リビング、和室、客間に寝室、2階に娘さんと息子さんの部屋がそれぞれある。合わせて80坪。将来二世帯住宅が可能なようにと、2階にはミニキッチンもつけた。「自分でも間取りをパソコンに入れましてね、ソフトを使って居住性やスペース、色の配色なんかを全部確認してOKを出したんですよ」。普通の人は、そこまでしたくても出来ないが、小泉さんは難無くやってのける。もともとエンジニア出身であるからこそ、かなうことだ。今年3月に着工してからは、会社へ行く前に毎朝立ち寄り、進捗状況を把握、鉄骨の太さまで見極めたという。「苦労したかいがあって、仕上がりには120%の満足感を得ています」とにこやかに話す小泉さん。

お話を伺ったリビングは、天井の高さといい、窓から差し込む自然光といい、くつろぎ度抜群、落ち着いたインテリアもよく調和している。「壁紙やカーテンといったものは、やはり素人の私達にはわかりませんから、すべて信頼してお任せしたんですよ」とは奥様の弁。

細かい所では、断熱性の高いペアガラスやスリット式の電動シャッター、小回りの効くU型キッチン、バーベキューのできるバルコニー等が良かったとのこと。

「家族がみんな、早く家に帰って来るようになったんです」と嬉しそうに話す。

庭の一角には手入れの良い盆栽が整然と並び、池の底にはゴルフボールがちょこんと顔を隠す。そして家の斜め裏手に建っているのは、今ではほとんど見かけなくなったお蔵。じつは小泉さんの家は、11代まで先祖をさかのぼることができるという。風格とか家柄といったものは、決して一朝一夕に成るものではない。ゆったりと流れる時の中で、代々受け継がれてきた小泉家の伝統が、こうしてまた新しい歴史を築いてゆくのだろう。

会いたい人から　会いたい人へ
知りたいことから　知りたいことへ
リレーでつなぐエッセイ

タウン・ウォッチング

宮川　佳代子
みやがわ　かよこ
「いろは塾」会員

つかの間の旅行を終えた帰り道、伊勢町通りに入ると“あー帰ってきたんだなあ”いう安心感でいっぱいになる。たとえば、それがバスでの帰りだったとすると、まだ私の降りるバス停からは3つも4つも手前であるにもかかわらず、この通りが窓から見えた瞬間、お財布を取り出し、小銭を手ににぎりしめながら、もっと身近な風景に近づくのをながめたりする。

私は、生まれて31年間、このまち伊勢町から離れて暮らしたことがない。小学校、中学校、高校、大学、そして今の職場と出かけて行く先は変わってきても、帰るところはずっとこのまちのままだ。このごろでは、暗くなってからでないと帰れないときが多く、また食料品などの買い物も宅配を利用しているため、まちを歩くことがめっきりなくなってしまい、素通りばかりしているが、子どものころには、毎日このまちのなかを小さな足でとびまわっていた。

学校への行き帰りには、伊勢町通りは車の行き来が激しく危ないからか、伊勢小の南につながる細い道を通っていた。

当時、その道の両脇には田んぼや畑があり、稲の刈取りが終わった田んぼのなかを歩いては、その持ち主のおじさんによく大きな声で怒られた。でも、石ででこぼこの道とは違うやわらかい土と、規則正しくそこに残っている稲の切り口とを踏みしめる感触がおもしろくて、おじさんに怒鳴られるスリルを味わいながら、田んぼのなかを歩くのがとても楽しかった。

田んぼといえば、春になるとれんげの花が一面に咲く田んぼが家から5分ほどのところにあって、そのピンク色のなかに入っていつまでもれんげを摘んでいた。その花で、友だちはとてもきれいで豪華なピンク色のリース（当時は首飾りと呼んでいた）をつくるのに、ぶきっちょな私にはどうしても同じようにつくることができず、悲しかったのを今でも覚えている。

秋になると、母から“すすきを取ってこい”指令が出て、荒川の土手に行き自分の背丈よりも大きいすすきをいっぱい母にもって帰った。家だけでは多すぎて、近所じゅうに配ったり、お月見用の花を売っていたやおやさんにもっていきお客さんのサービスにしてもらったりした。

私自身の秋の楽しみは、どんぐりひろい。住吉神社に大きな木があって、その下にどんぐりがいっぱい落ちているのを友だちと競争で拾い集めた。帽子のついているどんぐりが私たちの間では格が高く、それを数多く集めた人が幅をきかせていた。集めたどんぐりで何をするというわけではないのだけれど、そのどんぐりたちは大切な宝物だった。

伊勢町といえば、商店街でにぎやかないわゆる“お街”という感じがするが、そんななかでも子どものころはそれぞれの季節と仲良く遊んでいた。もしかすると、このまちにも“トトロ”が暮らしていて、そのころの私と一緒に遊んでいたのかもしれない。

いつのまにかなくなってしまったあのころの宝物たちのように、純粋に自然と会話するすべをなくしてしまったが、いつまでも季節の顔だけは忘れずにいたい。春夏秋冬移ろいゆく空の色をきれいだと感じ続けていたい。

もう一度トトロに会えるよう…。

見えないところでも日夜努力
ISOと格闘し続けているこの人に
今　エールを送りたい

ISO認証取得の社内推進を担当する
株式会社早野組　河西和彦（かわにし）さん（八代町）44歳

それは、昨年の8月に始まった

人は困難にぶち当たり、また大きくなる。大変だ、大変だと言いながら、結局、最後にはやってのけてしまう。河西さんはそんな人。ISOのプロジェクトチームに抜擢されたのは昨年8月。室員5名とともに、2ヵ月かけてISOの基礎学習を行なった。「最初は情報収集に駆け巡りました。当時、通常業務と兼務だったので、どこでどう時間をつくるかが問題でした」恐らく、自宅まで資料を持ち帰り、寸時も惜しんで勉強したことだろう。「とにかく品質マニュアルの作成が先決でしたから」年が明けて、今年の2月、河西さんともう1人が専属に、3月からは1人の兼務者も含め8人体制になった。それから全社員の教育、社内規定の作成等を随時行ない、7月から品質システムの運用を開始した。

「一番苦労したのは文書化作業です。ISO9001の要求事項は138項目あり、それをすべて文書化し、しかも実行できなければ意味がない。もともと製造業向けに書かれた項目を建設業に置き換えて、ウチでは何に該当するのか考えながらまとめるのが大変でした」例えば100社認証取得すれば、100社とも作る品質マニュアルが違うという。河西さんが、規定を文書化したファイルを見せてくれた。建築、土木すべて網羅したそれは、約10cmもの分厚いファイルだった。

ISO認証取得に向けて邁進する河西さん

ひとりの力と、みんなの力

ISOの認証取得は、社員全員の協力があって始めて可能となるもの。

「99点でも失格なんです。パーフェクトじゃないと」それがISOの厳しいところだという。

「本来、欧米で発足した規格ですから、非常に合理的なんです。それを日本の企業で同じように運用させるには、並大抵のことではありません。日本の社会と欧米との基本的な違いでしょうが、向こう（欧米の社会）では、紙に書いたものでないと信用されないんですよね。その点、ウチなどは特にあうんの呼吸でやってきたところが多いですから、実際にISOを満たすような文書を作るとなると現場の方は大変です」と土木出身の河西さん。急ピッチで作りあげてきた品質管理システムは、まだしっくりいかないところもあるという。「マニュアルは、その都度改訂していくんです。みんなが納得して出来る決まりを作りたいですしね」。

来年には本審査を控え、緊張感も漂う。「人間ひとりで出来ることは、たかが知れてます。大きなビルを造りたいと思っても、ひとりでは無理。大勢の人が力を合わせてこそ、実現するんですからね」ISOも同じだ。来春には、河西さんの笑顔がどうか見れますように。

◆ISOとは◆
1947年に発足した国際規格。フィルムの感度を表わすISO100や400等が有名。中でもISO9000シリーズは「品質管理及び品質保証」についての規格。1987年に制定され、日本でもここ数年、製造業を中心に認証取得し、登録する企業が急激に増加している。

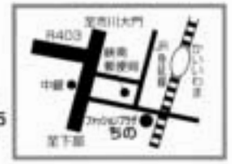
おしゃれ

ファッションプラザちの

よい品を　より多くのお客様に　より安く
地元ならではのあったかさを感じる店

「いらっしゃいませ」の後に「あぁ、○○さん、こんにちは！」そんな明るい挨拶が飛び交う衣料品店だ。平成2年にオープンした新しい店舗は、この町でひときわパッとした雰囲気を漂わせている。1階と2階で商品構成を変え、リーズナブルなものからブランドもの、普段着からフォーマルまでと、価格も種類も幅広く揃えているのが特徴。ここへ来れば大抵の衣料はある、という便利さに加え、趣向によっていろいろ選べるところが嬉しい。問屋より低価格で提供するため、仕入れに力を入れたり、出来るだけ広範囲に集客するため、"友の会"をつくったり、あちこちで工夫を凝らしている。「お客様に喜んでもらうには、何より労力を惜しまないことですよね」とご主人の俊司さん。また気軽に立ち寄りおしゃべりしながら楽しいひとときが過ごせるのも個人の店ならではの魅力だ。気さくで話好きな奥様の操さんを中心に、4人のスタッフもみんないい人ばかり。ぜひ一度、尋ねて見てはいかが。

営業時間　9:00～19:30
定 休 日　第1、第3日曜
所 在 地　西八代郡六郷町岩間1917
TEL 0556－32－2065



たべる

山祝 伊藤青果本店

創業67周年を迎える指折りの老舗
いいモノを提供するこだわり、受け継いで

「私の父がやってた頃はちょうど戦時中でしたから、政府の統制もあって、かなり厳しい状況をくぐり抜けて来たようですよ」とご主人の伊藤光雄さんは言う。病院やホテル、料理店への卸は、レタス3ケース、葱を4ケースといった箱売りが毎日。また御挨拶用の高級メロンや和洋中の特殊野菜など、大事な得意先からいつ注文が来てもいいよう常備を心がけているそうだ。

取り扱い品目は約50種類以上。青果物は鮮度が命のため、空調を効かせ店自体を冷蔵庫のようにしているが、そのうえ保冷庫を2つも備えている。旬がなくなった分、揃っていて当り前という時代。お客様の信用に応えるには努力を要する。

「大型店の進出で、やはり我々の業界でもみんなやめていってしまいます。でも10年先、20年先といった長い目でみれば必ず変わって来ますからね。一生懸命やれば必ずいい時代が来ますよ」。

今では長男の覚さん（29歳）が仕入れのほとんどをこなす。老舗のこだわりが見事に受け継がれているのは、何とも嬉しい。

営業時間　9:00～20:00
定 休 日　日曜、年末年始
所 在 地　〒400 甲府市寿8－15
TEL 0552－22－6043

―年中行事の習俗とその心―

冬至から歳神迎えまで

志摩（しま）　阿木夫（あきお）　民俗学研究者

冬至への思い

一年のうちで昼の時間が最も短い12月22日、この日が冬という季節の真ん中に当たる冬至である。昼が最も短いということは、太陽が最も力を弱め極限に達した日と受けとめた祖先たちは、太陽の復活を願って神への祈りを捧げた。それだから冬至が過ぎると一日に米粒ひとつ分日脚が延びるといったり、一陽来福などということばも生まれた。しかし日脚が伸びるとはいっても、目に見えてそれが解るものではなかったので、山梨には「冬至十日の居座り」といった俗語が残っている。

ともかく太陽の復活は、その恵みで生きている生命あるもの総（すべ）ての願いであるから、神への願いも真剣であった。神迎えのための身心浄化を図る方法として、この時季実るユズで湯を焚き、その強い匂いで身心を洗い潔めるユズ湯の習俗を生み、野菜の中で最も生命力の強いカボチャを食べて、乏しくなった生命力を復活させようとした習俗は、生きて働く人間にとって当然の思考であった。

歳神迎えの心

歳神とは正月さまのことである。歳神さまは毎年一定の時季に訪れてくるのだが、いったい何をしに訪れてくるのだろうか。そして何故にあのような丁寧な歓迎をするのだろうか。このごろの人たちはそれらの理由も知らずに、ただ「正月が来る」といって忙しく走りまわっている。

実は歳神さまという神さま（祖霊神）は、人びとが新しい年を迎えるため、ぜひ必要な「生きる力」を家々に持ってきてくれる大切な、そして尊い神さまである。もとこの神さまが訪れてくれなかったなら、新しい年を迎えても生きることができないし、当然働くことができないので、人びとは年の暮れが迫ってくると、何をさて置いても歳神さまを迎える準備をするのである。

まず神さまを迎える家やその環境を整えるための大掃除をして、そのあと身心を潔めてから神さまの目印（よりしろ）（依代）とする門松を飾り、餅をついて神さまを迎える歳神棚へ飾る、供え餅をつくる。これは神さまの御座所を意味する飾り物である。

こうして準備万端整えたところで12月31日、つまり大晦日（おおみそか）を迎えるわけである。歳神さまはこの日の夕方落日とともに訪れてくるので、この夜心を籠めて作る歓迎の料理が「節料理（おせち）」である。

年の最後の日神さまを迎えて、神・人共食をすることで、新しく生きる力と働く力を授かるというのが先人の心であった。大晦日の夕方に神迎えをするというのは、古い時代の日の観念が、日の出から日没までを一日としていたことから、12月31日の没以後はすでに1月1日の分になっていたことによると思えばよい。

なおこの夜のことを「除夜」と名づけているが、歳神さまの訪れを喜んで、人びとは神さまとともに眠らず朝を迎えたため「夜を除く日」としてその名が生まれたのである。

こうしてみると正月といい、歳神迎えといい、現代人の感覚はまことに形だけのものになってしまっている。もっと真摯な態度が欲しいものである。

コラム

某月某日

コンピューターは人間の頭脳に勝るのか？
チェスやオセロの世界チャンピオンが　コンピューターに敗北した今日
人間の頭脳が勝る点はどこだろう？

・人間らしさって何？

地べたに座って昼飯を食べる若者はお行儀が悪いのか？

・アメリカのホームレスを見習って…

×月×日

チェスの世界チャンピオンに続いてオセロの世界チャンピオンがコンピューターに負けたそうである。自称ゲーム・フリーク（ゲーム狂）を唱えている者としてここは黙っていられない。

六年ほど前アメリカに居たとき、私のチェスの師匠だったマークは、AIならぬASという造語を作って皆を喜ばせてくれた。AIとは、電化製品などでもうお馴染みとなったArtificial Intelligence（人工知能）を指す言葉であるが、プロのチェス・プレーヤーとしてコンピューター会社に評価顧問として雇われていたマークは、開発スタッフが苦労を重ねたプログラムが、突如としておかしな手を連発することをAS即ち（人工狂気）と称して揶揄したのである。

当時は、各企業がこぞってチェス・プログラムを開発している時期であった。意地悪なマーク師匠は、「今の会社で製作しているプログラムは、多分君が束になってもかなわないくらい強いが、製作スタッフの人達は、多分君よりも遥かにチェスが弱いんだぜ」と言い、私は機械に劣等感を覚えたが、では人間の頭脳が勝っているのはどの点だろう。

一対一のゲームと言う極端に合理化された世界では、効率の高いものが必ず勝者となる。ここでいう効率とは、例えばどれくらいの情報量を蓄積でき、どれだけ素早く正確に計算できるか、という技術（戦術）レベルでの優位性である。この点で人間には無駄がある。しかしながら、無駄無く最適化を行うと言う点はコンピューターの弱点ともいえよう。

人間の頭脳には無駄に使われている部分が多い。だからこそ柔軟性が高いとも言えるのである。初期のチェス・プログラムの弱点は、人間の無意味な悪手（天然狂気？）に対応できないところにあった。機械は、人間の非合理的な行動には硬直化してしまう。

現代社会は効率を求める。しかしながら、人間性は効率から遠く離れたところに存在する。社会は非合理的な人間の集団であることを忘れてはならない。さもないとブラック・マンデーの大暴落を引き起こしたコンピューター売買の二の舞になる。こう考えると私の人生で無駄に過ごした時間も無駄ではなかったと言えるのだろうか。

×月×日

今時の若者は、地べたに直接座って昼食を摂ることに何の抵抗もない。実は私も、歩きながらハンバーガーをぱくついたり、公園の噴水のところに座っておにぎりを食べたりするのは好きな方である。そこにはなんとも言えない解放感がある。

しかし、子供のころ母親に「地べたに座って休むなんてお行儀の悪いことはやめなさい」と言って怒られた記憶がある。それが潜在意識の中に植え込まれて、一種の道徳規範となって道端に座って休むことにはやはり抵抗を覚えるともいえる。

西欧の人達は、割とその辺の道徳感はないようで、公園の芝生に座ってバナナとミルクの昼食を摂る姿はどの町でもみられる。ホームレスの姿も、日本のそれのようなある種の違和感が薄いようである。文化の違いと一言で言ってしまえばそれまでだが、この違いはどこからくるのだろう。

西欧社会は狩猟民族の社会であると言われる。彼らにとって、獲物を追いながら移動し、いつも違ったところで食事をするのは当然のことである。これに対して、農耕民族である日本人が転々と移動を繰り返しては、よい作物が育たない。一時期日本で報道された、ホームレスの人達を迫害する若者は、深層心理に埋め込まれた農耕民族の社会規範によって衝動的に行われたものと理解することができる。その一方で、階段に座っておしゃべりをしたり食事をしている若者の姿を見ると、狩猟社会へと変遷して行く日本の姿を垣間見るような気がする。

［文：杉村　聡］